

# 総ぐるみ「新聞」

ひぎりやまそう

つど

NPO総ぐるみ福祉の会 事務所は日限山4・44・23の宮崎宅です。入会や活動等については、宮崎浩子 TEL844-7477、増澤喜一郎 TEL842-9084、笠原松次 TEL845-6263、菅沼永子 TEL844-9193、米川満寿子 TEL841-9433、菊地幸子 TEL841-4882に。

日限山荘でも受け付けています。

## お陰様で好評です。日限山荘の憩いの集い

先月号でお知らせした「日限山荘」日限山4の7の1桑田さんの二階での集いがようやく本格的に動き出しました。

現在「日限山荘」は週に2回ほどオープンしています。写真はオープニングパーティーの様子。3日間で延べ三千人ほどのご参加がありました。お料理は地域の方の手づくりをお願いしましたが、召し上がった人も、作った人も大満足でした。

今後の計画としては、おしゃべりばかりではなく、勉強をする場所「寺子屋」をやりたいなあと、増澤さんが目を輝かせています。漢文の先生に来て頂き、中学生、そのお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に勉強をしたい。きちんと正座をして、コピーやプリントを使わずノートに書き写す授業をしたいと夢を描いています。



「お手製のお料理、とっても美味しいわよ。今度はあなたとここで会いましょう」

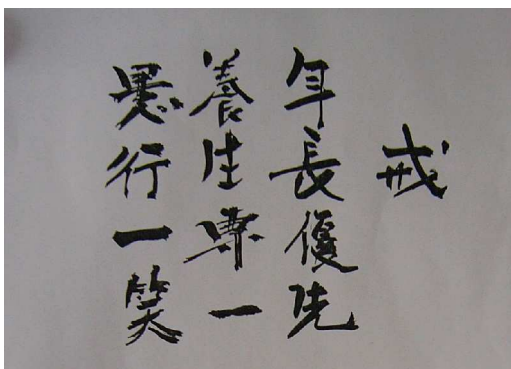
### 墓情記

謹んで冥福を祈ります

総ぐるみ福祉の会「設立発起人十八人中の一人、正会員 今川直次郎氏は平成十六年七月十六日、薬石効無く黄泉に赴く。

大正十二年組で生まれ月順に、増澤、庄司、長谷川、今川の四羽鳥の二羽を欠く。正に痛恨の極みなり。四人会入は必ず「同期の桜」を歌う。嗚呼、以て何を言はん哉。魂よ安らかに眠れ。

NPO総ぐるみ福祉の理事 増澤喜一郎



増澤理事の筆になる日限山荘の「戒」

◎「日限山荘」は8月はお休みとします。9月に、またお会いしましょう。

## 理想の介護は 在宅介護」

### か？ 施設介護」か？

#### あるベテラン介護生の手記

「自分の親を老人施設へ入所させたい」と相談に来る人のなかで、少なからぬ人たちが『姥捨山』と同じ事をしているのではないかと、罪悪感に似た後ろめたい気持ちを持っているという。

「在宅で介護したいのですが、しかし…」というための言葉にそれが窺われる。親の側からも「できれば在宅で介護を受けたい」という気持ちは強い。住み慣れた家、手をかけた庭の木々、家族、隣人、友人たちに見守られて生を全うしたい、というのは人間として当然の願望である。

弱者をいたわる行為は、人間しかない、人間だから出来る、最も人間らしい行為だ。それが夫婦・親子の関係ならば言うもさらなり、であろう。

しかし、本人の状況によっては、在宅介護がベストといえないこともある。老化の進行に伴って起こる排泄失禁、感情失禁、被害妄想、不眠・昼夜逆転などの行動に対し、家族は常に冷静な平常心で対応できるだろうか。

在宅介護には、尋常ならざる気力、体力が要求される。しかも短日時ならともかく、一月、半年、

二年、三年…となり、朝から晩まで続く。それが意識しての言動でないことは理性では判っている、言葉が荒くなる位では収まらない。思わずかっとなって、つねる、叩く、縛る、無視する、放置する…と老人虐待へ進行することだってある。

介護を受ける側の心の傷もきわめて大きい。老化や痴呆が進んでいるので本人は判らないのでは…などと考えるのはとんでもない間違いだ。

人間、見当識を失っていても、叱責され、注意された時の、本人の恐怖感、自尊心の傷つきは甚だしいという。きつい言葉でなくとも、駄目じゃないの」「何度言ったら判るの」など、健康時にいわれるのとはショックが違う。

家族だけの在宅介護を理想として選択した結果、こんな最悪のケースとなり、家族も本人も心身共に傷つき、終生悔やむようにならないだろうか。

施設介護ではそういうことはあり得ない。

専門教育を受けた職員が介護を担当し、複数の職員が常にフレッシュな気持ちで二十四時間接することが可能だからだ。

その上、看護師による健康管理やバイタルチェックが毎朝実施され、検温や血圧測定によって少しでも異常があれば医師の検診を受けられる。

食事を例にとると、欠けているのは陪食する家族のぬくもりだけ。管理栄養士によってカロリーが計算され、健康状態や歯の状態を考慮したメニ

ューは、糖尿病や高血圧等の疾病にも医学的に対応している。

しかしながら、現実には大多数の人々が終生在宅を望む。その一方で、家族には迷惑はかけたくないという思いも強い。それがポックリ願望（ピンピンコロリ願望）の大きな理由の一つであろう。

この相反する望みをどうするか。

それは在宅介護と施設介護の双方をうまく利用することである。

たとえば、施設は、できるだけ“スープの冷めない距離”にあるところを選ぶ。そして、折りにふれ家族が見舞いに訪れる。

その際、家族は、美味しいお茶に、本人愛用の湯呑み、好みの菓子等を持参し、施設の談話室での歓談を自宅の雰囲気に変える。

また、短期間（二、三日）の帰宅の機会を極力増やし、一家団欒のときを過ごす…。

こうした一寸した工夫が、距離を置いたからこそ可能な家族の愛情を醸し出してくれる。要は、在宅と施設の良い点を前向きに検討し、それを最後のライフスタイルの中に上手に取り入れることである。

以上、『総ぐるみ福祉の会』で介護の仕事の手伝いをしながら、理想の介護とは何かを考えている熟年介護生の「思へらく」としてお読み頂ければ幸せである。